

## 取組報告

### 山際 美喜 (YAMAGIWA Miki) / 京都教育大学附属幼稚園 教諭

幼児は、幼稚園の遊びや生活の中の様々な場面で、非認知能力を育んでいます。3歳児ではまず安心感をもって生活することを大切にしています。昨年度の教育フォーラムでは、その非認知能力について3歳児の姿からお話ししました。そして、4歳児では、友達の存在を感じながら、自分の思いを表現したり、自分と向き合ったりする経験を大切にしています。

今回は、5歳児のリレーの事例を通して、非認知能力について考えます。5歳児は、自分のしたい遊びを見つけ継続して遊ぶ姿が見られます。そこには友達の存在があり、互いに刺激し合い、共通のめあてをもって一緒に遊びを進めていきます。リレーの事例でも、友達と一緒に取り組む中で、いろいろな非認知能力が育っています。幼稚園の「遊びの中で学ぶ」という姿から非認知能力について考えられるように、具体的にお話ししたいと思います。

### 法橋 秀明 (HOKYO Hideaki) / 京都府向日市立第5向陽小学校 教頭

本校は、令和3年度より京都府教育委員会から「絆の作り手育成プログラム」研究校の指定を受けて、生活科・総合的な学習の時間を軸として課題解決型の学習に取り組み、「チャレンジ！あきらめない！みとめあう！みんな大好きスマイル5向」を合言葉にして、「自己有用感」を育む教育活動を推進しています。3年間、学校全体で地域を教材として授業づくりに取り組んできたことや6年生の子どもたちが向日市の魅力を広めるためにチャレンジしてきたこと、そして、それらを通して子どもたちが変容してきたようすについて伝えたいと思います。

### 久保田 守 (KUBOTA Mamoru) / 京都市立西京高等学校附属中学校 教諭

「どのように学べばいいのか」「どのように考えればいいのか」といった、学び方や考え方にあたる学習方略を生徒は備えることができているでしょうか。取組では、自らの学習過程を客観的に捉え、適切な学習方略を選択し学習を改善するための振り返りを行うことにより、主体的に学習を進めていくことができる生徒の育成を目指しました。生徒は家庭学習と授業の双方の場面で、認知的方略(自分自身の記憶や思考など認知的なプロセスを調整することで効果的な学習を促す学習方略)を自己選択し、それを振り返って次の学習に生かすという自己調整に取り組みました。

#### お問い合わせ先：

京都教育大学 学術研究支援課 研究支援グループ  
電話 075-644-8117 メール kenshien@kyokyo-u.ac.jp

京都教育大学フォーラム2023

# 非認知能力を考える2

—毎日の保育・教育活動の中で—

2023年12月16日(土)

13:30 受付 / 14:00 開始 / 16:30 終了

会場 京都教育大学藤森キャンパス 共通講義棟 大講義室2

## プログラム

- 14:00 開会あいさつ  
浅井 和行 (京都教育大学 副学長)
- 14:10 趣旨説明  
平井 恭子 (京都教育大学 教授・研究推進室員)
- 14:15 講演「非認知能力の格差と学校教育」  
講師  
森口 佑介 (京都大学 准教授)  
コーディネーター  
田爪 宏二 (京都教育大学 教授)
- 15:25 取組報告  
山際 美喜 (京都教育大学附属幼稚園 教諭)  
法橋 秀明 (京都府向日市立第5向陽小学校 教頭)  
久保田 守 (京都市立西京高等学校附属中学校 教諭)
- 16:25 閉会あいさつ  
植山 俊宏 (京都教育大学 副学長・研究推進室長)
- 16:30 閉会  
司会進行 神代 健彦 (京都教育大学 准教授・研究推進室員)

主催 京都教育大学  
後援 京都府教育委員会・京都市教育委員会



## ごあいさつ

太田 耕人 (OTA Kojin) / 京都教育大学長



経済学者のジェームズ・J・ヘックマンが「非認知能力」の大切さを広く提唱したのは、2013年でした。それからわずか10年、その特質から「社会情動的スキル」とも呼ばれるようになった「非認知能力」は、今や最も熱い関心をあつめるテーマです。

2015年にOECDが、早々とワーキングペーパー「家庭、学校、地域社会における社会情動的スキルの育成」を出したのはよく知られています。非認知能力をどう測定・評価しうのか。私は当初、懐疑的でした。しかし、OECDの教育・スキル局長、アンドレアス・シュライヒャーは物理学、数学・統計学といった分野の出身だけに、その後実施した「社会情動的スキル調査」(SSES)においてエビデンスの数値化を進めています。非認知能力の「見える化」がある程度なされたことで、スコットランドを筆頭に多くの地域で、非認知能力を伸ばす教育が目覚ましい進展を見せています。

このフォーラムでは、昨年も非認知能力を取り上げました。研究者が非認知能力の定義や評価を巡って対談し、本学附属幼稚園、京都市立小学校、京都府立中学校が取組を報告しました。校種も設置者も異なる三つの現場からの報告で、非認知能力のありようが立体的に浮かび上がりました。

今年のフォーラムでも、日々の取組の中でいかに非認知能力を育むか、具体的な指導の実際をお示ししたい、と考えています。ご講演いただく森口佑介先生が言及されるであろう課題や、理論的な視点が、現場の実践例から照らし出されることもあるかと思えます。なにとぞ最後までよろしくお付き合いください。

## 開催趣旨

平井 恭子 (HIRAI Kyoko) / 京都教育大学 教授・研究推進室員



**プロフィール:** 専門は、幼児の音楽教育。大学院修了後に公立幼稚園、国立大学附属幼稚園にて保育者として勤務。研究テーマは、うたや身体の動きを使った音楽教育方法や乳幼児の音楽行動にみられるリズム感の獲得過程。2018年4月から2022年3月まで4年間、京都教育大学附属幼稚園長を兼務。監修した視聴覚教材: DVD「音楽的な遊びにみる乳幼児の発達」第一巻～第四巻(新宿スタジオ)。

感染症の流行、ウクライナや中東での戦争勃発、人工知能(AI)の台頭による仕事や生活への影響など、今、私たちは将来を予測することが困難な時代を生きています。こうした中、子どもたちが未来において、社会の中で主体的に役割を果たしながら、心身ともに幸福な生活を送るために必要な力として、非認知能力に注目が集まっています。

昨年度は、非認知能力に関して定義、見取り、評価、という3つの視点から討議を行いました。その結果を受け、今年度は、「探究活動」や「総合的な学習」等の特別な学習の中で扱われることが多い非認知能力について、通常の授業や毎日の保育の中で、子どもたちの学びに向かう力をどのように見取り育ていけばよいのか、ということに焦点をあてて検討したいと考えております。特に、非認知能力に関して造詣が深い森口佑介先生には、発達心理学の観点から、それぞれの発達段階における非認知能力を如何に捉えるべきかについて、示唆をいただきたいと考えています。

本フォーラムが非認知能力に関する教育実践の更なる深まりと発展に貢献できれば幸甚です。

## 講演

### 非認知能力の格差と学校教育

【講師】 森口 佑介 (MORIGUCHI Yusuke) / 京都大学大学院文学研究科 准教授

**プロフィール:** 専門は発達心理学・発達認知神経科学。子どもを対象に認知、社会性、脳の発達を研究する傍ら大阪府の家庭支援事業にも携わり、子どもの発達の知見を広く発信する。著書に「10代の脳とうまくつきあう 非認知能力の大事な役割」(ちくまプリマー新書)、「子どもから大人が生まれる時発達科学が解き明かす子どもの心の世界」(日本評論社)など。



【コーディネーター】 田爪 宏二 (TAZUME Hirotsugu) / 京都教育大学教育学部 教授



**プロフィール:** 博士(心理学)。専門は発達心理学、認知心理学。研究領域は概念や言語と関わった認知的情報処理のメカニズムとその発達に関する実験的研究、認知的個性を生かした教員養成教育、フィールドに根ざした発達の理解と支援に関する研究など。主な著書「認知発達とその支援」(共編者)、「教職エクササイズ 教育心理学」(編者)など。

現在、教育・保育の現場や教育ビジネス界隈のみならず、教育学や経済学においても非認知という言葉が広く使われるようになってきている。ただ、社会的注目が過熱気味になる一方で、非認知は使い勝手のよいマジックワードになっており、一部の心理学者や認知科学者からは懸念が示されている。本講演では、非認知能力にかかわるプロジェクトにかかわってきた講演者が、このような現状を整理しながら、子どもの育ちや保育・教育に対して非認知能力の研究がどのような寄与をするかを解説する。

具体的には、まず、非認知能力を、学術的知見に照らし合わせて、乳幼児期と児童期以降に分けて概観する。前者については実行機能や向社会的行動が重要であること、後者については、実行機能や粘り強さ、情動知能や向社会的行動などが含まれることを説明する。

次に、非認知能力の中でも、学術的知見が蓄積しており、かつ、子どもの適応や将来のアウトカムと関連することが繰り返し示されている実行機能の育ちについて詳しく解説する。実行機能は、目標を達成するために行動を制御する力のことを指す。乳幼児期の実行機能の情動的側面と認知的側面の発達とその格差についてみていく。

また、非認知能力は、乳幼児期に加えて、青年期にも大きな発達の変化がみられるため、青年期の実行機能の発達についても解説する。特に、情動的な側面の実行機能が青年期において一時的に停滞もしくは低下すること、それは脳の急速な変化と関連することを説明する。

最後に、乳幼児期および青年期における実行機能をどのようにして支援するかについて説明する。特に、乳幼児期においては、養育者や保育者との関係が重要であること、乳幼児期および青年期において実行機能を支援するためには運動、マインドフルネス、ごっこ遊び、音楽などが注目されていることを紹介する。